

Title	荻生徂徠(三省堂発行, 野村兼太郎著)
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Ariga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1935
Jtitle	史学 Vol.14, No.1 (1935. 4) ,p.177- 178
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0177">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19350400-0177</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

荻生徂徠 (三省堂發行)  
野村兼太郎著

徳川時代の社會經濟思想を考察する場合、かりに寛政の頃を中心として前期・後期の二大時期に區別するとするならば、前期の思想は封建制度本來の組織に従つて飽くまでもその組織を維持せんとするものであり、後期の思想は、時代の要求に従つて封建社會の本質に多少の修正を加へんとするものであると概言することが出来るであらう。即ち前期は封建的であるが、後期は反封建的であるといふべきである。元來、武士階級の經濟的困窮は前期に於ても既に甚しいものがあり、これを如何して救済せんかは多くの論者によつて最も熱心に考究された問題である。けれども前期の論者は當時著しく發達し來つた貨幣經濟を抑壓して、封建制度本來の自然經濟に引き戻すべき方法を論唱するのであつて、後期の論者が武家の困窮を救はんが爲には武家の町人化をも敢へて介意するところでなかつたのと著しい對象をなすものである。後期に現はれた學説は、封建制度本來の面目維持に忠實でなかつただけ、それだけ武士階級を經濟的に救済し得る可能性が多かつたが、前期の思想は、封建制度の本質を傷けまいとするだけ、それだけ實際上の可能性といふ點から觀れば理想的に過ぎたやうに思はれる。要するに斯様な學説上の變遷は、時代の經濟的變化、乃至は爲政者の態度の變化に據るものと考へるべきであらう。兎に角、前期の思想は封建時代本來の思想であるが、後期の思想は封建制度の崩壊過程を反映するものであると觀ることが出来る。さて然らば前期に於ける所謂封建時代本來の思想家のうち、その最も代

表的なものといへば、荻生徂徠を措いて他にこれを求めることは不可能である。蓋し彼れは、時代の弊風を洞察するに最も炯眼にして、その盪除を論策するに最も徹底的であり、而して封建制度の維持に最も忠實であつたが爲である。著者野村教授が徂徠の思想を以て「封建的經濟理論の最高峰」となし、特に徂徠の思想を重要視されたのは全く正鵠を得たものであると思ふ。

經世論者としての荻生徂徠の思想は、「政談」及び「太平策」に披瀝されたものを以てその全部とみることが出来る。けれども當時の文獻の性質として一般に隨筆的であつて纏つた體系をもつてゐないことは、兩著とも例外たる資格はない。さればこれ等の材料から徂徠の思想體系を編み出すことは決して容易な業ではない。然るに本書に於ては徂徠の思想が最も截然たる形式に整理され、然かも最も卓拔なる見解を以て論述されてゐるのである。

徂徠の活動した時代の歴史的背景と幸運兒としての彼の生涯を描いた第一章並に彼の學者として生活を敘述した第二章は、謂はば本書の序論である。社會科學の建設者としての徂徠の思想は第三章以下に論述されてゐる。先づ第一に、徂徠が封建的經濟論者として武家本位、更に幕府中心主義の立場をとつてゐたこと、また彼れが身分的制度を樹立するの必要を經濟的、理由から基礎づけたことを指摘し、彼れの斯かる現實的態度を以て徂徠の徂徠たる特徴であると説明された(第三章、批判の立場)。次に徂徠の貨幣と物價との關係に關する思想については、暗に數量説を取つてゐたものゝ如くであるとせられ、而して彼れの政策は錢によるインフレーションを以て人心を緩和し、然る後に彼れの理想とする

科學の建設者、人と學說叢書、定價一圓二十錢)(有賀春雄)

德川時代の社會經濟思想概論 (日本評論社發行)  
(野村兼太郎著)

社會改革を實行せんとするものであることを論じて居られる(第四章、貨幣經濟批判)。「政談」に於て徂徠が最も強調する武家土着論は、彼れの社會改革論の中心である。即ち著者は武家土着論を主として、徂徠の社會改革論を批判せられた。「彼(徂徠)は貨幣經濟の弊害を知り、殊にそれが武士を中心とする封建社會を毒するものであることを悟つて、これが救濟策として自然經濟に歸らんとする者である」となしました「徂徠は、商人の有する經濟的權力を——當時の言葉で以てすれば財用の權を——純粹の封建制度を樹立することに依つて奪回せんとしたのである」となし更に「要するに商人を除く、あらゆる階級にとつて地方生活が必要であり、又それに依つて現存する諸弊害を救ひ得ると考へたのである」と述べて徂徠の武家土着論を説明せられ、次に戸籍・路引その他について述べ、以て徂徠の庶民統制法を明らかにせられ「幕府をして極力強化して武家中心の社會を實現せんとしたこと」に於て、「斯くまでも大膽に、又かくまで組織立てて、武家階級救濟の改革案を提言したものは、以前には全く發見されない」と結んで居られる。(第五章、社會制度改革論)。最後に德川時代の社會經濟思想史上に於ける徂徠の位置について、「封建的經濟理論の最高峰」たることを強調せられ、而して彼れの思想が後世如何に發展せるかを辿つて居られる。(第六章、結論)。要するに本書は社會科學建設者としての荻生徂徠を論述したもので、彼れの經濟論と社會改革論を最も深く研究され、而して最も的確なる批判を下して餘蘊なきものといふべきである。封建思想に多少とも興味を有するものとして筆者は心から野村教授に敬意を表する。(社會

從來德川時代の社會經濟思想を論じたものは少なくないが、これを歴史的に取扱つたものは殆ど無いといつてよいであらう。本庄博士や瀧本博士や中村博士は何れも德川時代の經濟思想研究に於てそれ／＼特色ある著述を公にされてはゐるが、未だ思想的體系を備へたものは遺憾ながら發表されてゐないのである。野村教授の「德川時代の社會經濟思想概論」は敢へて思想史と銘うつたものではないが、内容は立派に體系づけられた思想史である。一體、德川時代を一口に封建制度と概稱し、これを綜觀的に取り扱ふ方法は、勿論意義が無いとは言はれないが、然し二百數十年間の變遷を無視するのは贊成いたし難いところである。思想に限らず政治でも制度でも所謂德川三百年間に於ける變化の跡を觀なければそのものゝ意味が完全に理解できるものではない。筆者は久しく德川時代に於ける社會經濟思想の發展的研究の公けにされるのを期待してゐたが、今や野村教授の著書を手にすることを得て、久しい渴望は完全に醫せられた心地がする。

本書に於ては德川時代が四つの時期に區畫せられてゐる。即ち元祿以前を幕府草創期とし、元祿・享保時代を幕府成熟期となし、更に寶曆・明和より寛政に至る時代を幕府頹廢期とし、最後に化政・天保時代を幕府衰亡期とし、以て時代の變遷と思想の發展とを辿つて居られる。然かも時代の背景を明確に描寫し、思想の時代的特色を確然と指摘し、時代と思想との交響に明快なる説明を